

保育者養成校における園庭を活用した事故防止及び 安全対策の指導法の検討

甲 賀 崇 史

Teaching Methods of Child Injury Prevention and Safety Utilizing the Play
Ground in Students Studying Early Childhood Education

Takashi Kohga

要約：保育内容「健康」の授業において、幼稚園の園庭を活用し、学生に事故が発生しやすい場所や状況を考えさせることで、リスクを予知し危険を回避する能力を高める指導法の在り方を検討した。本稿では、事故が起きやすいと学生が回答した場所と事故が起きやすいと学生が回答した状況を分析した。事故が起きやすいと学生が回答した場所では「滑り台」など大型の固定遊具が高スコアであった。事故が起きやすいと学生が回答した状況では「子ども」「上」「登る」「落ちる」などの語彙において高頻度かつ強い結束性が示された。学生は「高いところに登って落ちる」事故の発生を最も想定していることが示唆された。本稿の結果を今後の授業の改善に活用していくことが今後の課題である。

キーワード：保育者養成 保育内容「健康」 事故防止 安全対策 固定遊具

1. 問題と目的

子どもの健康及び安全は、生命の保持と健やかな生活の基本である。保育における健康及び安全の確保には、事故防止と安全対策がある（厚生労働省，2008）。保育所は、事故防止と安全対策のため保育所内外の安全点検に努め、職員の共通理解や体制作りを図ることが求められる。

保育所における事故の特徴は、家庭での事故と異なり管理上の責任が生じることである。とりわけ近年は、保護者が子どもを大切に育てる意識が強く、保育所に対して過剰に反応する傾向があり、小さな事故でも保育所や保育者の責任を問われる事例が増加している（田中，2011）。保育者は、保育所における事故防止活動に対して、これまで以上に慎重な姿勢で取り組む必要がある。

従来、保育における事故防止や安全対策は、事例が少ないため研究として取り上げにくく、学会発表もわずかであった（近藤，1997）。しかし近年、保育所運営や保育者の責任が問われる社会的動向に鑑み、保育における安全及び危機管理の在り方（牧野，2013；小笠原・根上・崎村・玉村・安留，2010）、事例の分析に基づく事故の要因の検討（浦添・仙田・矢田，1997）、保育者の安全及び危機管理に関する認識（大西・矢野・片岡・森澤・小島・山崎，2013）などが報告されている。今後は、これらの知見の一層の蓄積と園内及び園間で活用される事故予防システムの構築が課題である（田中，2006）。

保育者養成課程において、事故防止及び安全対策は「保育内容（健康）」等の授業科目で扱われている（例えば、民秋・穂丸，2014）。学生に事故防止及び安全対策を指導することの難しさは、保育所における事故のリスクが、ありとあらゆる時間と場所に存在していることである。事故が起きやすい場面や注意すべき事項を伝えることは可能だが、実際に事故が起きる全ての時間や場所を網羅的に伝えることは不可能である。したがって、事故防止の授業においては、保育者が事前にリスクを予測する洞察力を身につけ、瞬時に危険を回避する能力を高める指導が現実的かつ重要である。

これまでも、学生に事故が想定される場面を視覚的に提示して、リスクの存在と事故防止の対策を考える機会を提供し、学生のリスクの感性を磨く指導の在り方が検討されてきた。例えば、伊東・大野木・石川（2012）は、学生や現職者の協力を得ながら、子どもの事故に関わるヒヤリハット認知 24 場面の図版を用いた教材を開発している。事故防止の学習においては、他者から聞いて覚えるよりも、自分自身で考えたことの方が長く記憶に残り効果的といわれている（田中，2006）。いかなる事故のリスクが、どの程度の危険度で存在しているかを学生に予測させる伊東ら教材は、人間の記憶のメカニズムの観点からも、保育者養成課程における事故防止に関わる教材として有効といえる。

しかし、こうした図版を利用した危険予知訓練の指導は、あくまで先に教員が事故の発生が想定される場面を提示し、その後で学生に事故防止の対策を予測させることに課題が残ると思われる。すなわち、先行研究で開発された教材は、園環境のなかから事故の発生

が想定される場所と状況を見つけ予測させることは考慮されていない。こうした課題を克服する授業実践のひとつとして、実際の保育所や幼稚園を活用する方法が考えられる。学生が実際に保育所や幼稚園に足を運び、自ら動きながら園環境に存在するリスクを考えることで、授業のなかで事故の発生が想定される場所と状況を見つける機会を提供できると思われる。また、本研究で計画した授業実践は、教員の一方的な講義ではなく、学生がフィールドに出て能動的に事故が起こりやすい場所及び状況の調査をおこない、調査結果をお互いに話し合う授業の形式であり、我が国の大学教育が転換を目指すアクティブ・ラーニング（文部科学省、2012）への取り組みという観点からも価値があると考えられる。

以上を踏まえて本研究では、保育内容「健康」の授業で、幼稚園の園庭を活用した事故防止及び安全対策の授業をおこなう。具体的には、学生が幼稚園の園庭を自由に移動し、事故が起こりやすい場所と状況を予測させたのち、学生同士で予測した場所及び状況について議論させる。本稿では、授業の改善のための基礎的資料を得ることを目的として、①事故が起きやすいと学生が回答する場所、及び②学生が園庭で事故が起きやすいと予測する状況の2点を報告する。

2. 方法

i. 対象者

2016年10月に保育者養成校に秋季入学した学生のうち、欠席者および単位認定者を除いた10名であった。性別は、女性8名、男性2名であった。養成校に入学して約半年が経過していたが、実習は経験する前の段階であった。

ii. 実施状況

授業は、2017年4月6日1限(9:00～10:30)に実施された。見学する場所は園庭に限定し、室内は対象外とした。対象園は始業式前であったため、授業実施時において子どもの姿はみられなかった。なお、幼稚園は養成校に隣接しており、実習事前指導の授業における若干の出入りはあったが、学生が園に入り子どもや教職員と交流する機会はなかった。

iii. 手続き

はじめに演習シートを学生に配布して、教室で授業の流れを説明した。具体的には、i)園庭で子どもたちが自由に遊んでいる場面を想定すること、ii)事故が起きやすいと予測される場所の写真を撮り、そのなかから上位5箇所を書き出すこと、iii) ii)で書き出した場所において、事故が起きる状況（何をしているときに、どうなる）を書くこと、の3つを口頭で指示をした。配布した演習シートにも、i)～iii)と同様の内容が明記されていた。学生からの質問がないことを確認したうえで、教室を出て幼稚園に移動し、園庭を自由に移動して事故が起きやすい場所を予測させた。所用時間は約30分で、学生が自分で考えることを重視するため、この時間のみ他の学生との相談を禁止した。全員が演習シートへの記入を終えたところで教室に戻り、撮影した画像ファイルを授業担当講師（筆者）

に送信させた。画像ファイルをプロジェクターで投影し共有したのち、撮影した場所において、なぜ、どのような事故が起こりやすいと予測したかについて学生同士で議論させた。学生同士で議論させた後に、講師（筆者）が教科書（民秋・穂丸，2014）を参照させながら、事故が起きやすい場所と状況を説明した。また、予め授業で活用した園に勤務している保育者1名から事故が起きやすい場所および状況を聞き取り、学生と教員とのズレを話し合った。なお、保育者からは「滑り台やジャングルジムは稀だが大きな事故になりやすい」一方で、「走っていて木の根などにつまずいて転倒する」、「走っていて振り向きざまに友達と衝突する」ことで事故が起きやすい、回答が得られた。

iv. 分析方法

事故が起きやすいと学生が回答する場所の分析は、「iii. 手続き」の「ii」で示した「上位5箇所」において、1位に5点、2位に4点、3位に3点、4位に2点、5位に1点を与えて点数化し、すべての学生の結果を足し上げて総スコアとした。また、学生が園庭で事故が起きやすいと予測する状況の分析は、「iii. 手続き」の「iii」における学生の回答をKH Corderに入力して分析した。KH Corderは、テキスト型（文章型）データを分析するためのフリーソフトウェアである（樋口，2014）。本研究では、自由記述のデータから語を自動抽出し、語と語の結びつきを探る共起ネットワークを使用した。

3. 結果

3-1. 事故が起きやすいと学生が回答した場所

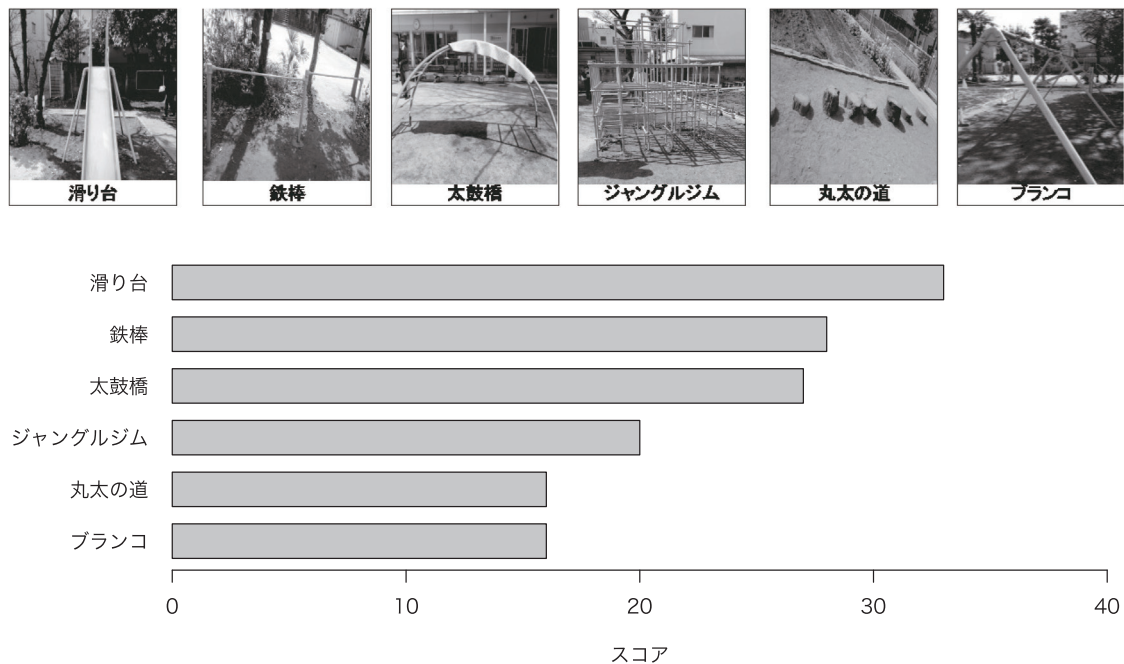


Fig. 1 事故が起きやすいと学生が回答した場所の総スコア（15点以上）

事故が起きやすいと学生が書き出した場所の結果を Fig. 1 に示した。左側は学生が撮影した写真、右側は総スコアで、アルファベットは写真と対応関係にある。総スコアは、15点以上の場所のみ抜粋して掲載した。

総スコアが高い順に「a. 滑り台 (33点)」、「b. 鉄棒 (28点)」、「c. 太鼓橋 (27点)」、「d. ジャングルジム (20点)」、「e. 丸太の道 (16点)」、「f. ブランコ (16点)」であった。総スコアが高い場所は、すべて固定遊具であった。学生は、園庭において子どもは固定遊具で事故を起こしやすいと考えていることが示唆された。なお、15点未満の場所は、「流し台」、「雲梯」、「手押し車」などであった。

3-2. 学生が園庭で事故が起きやすいと予測した状況

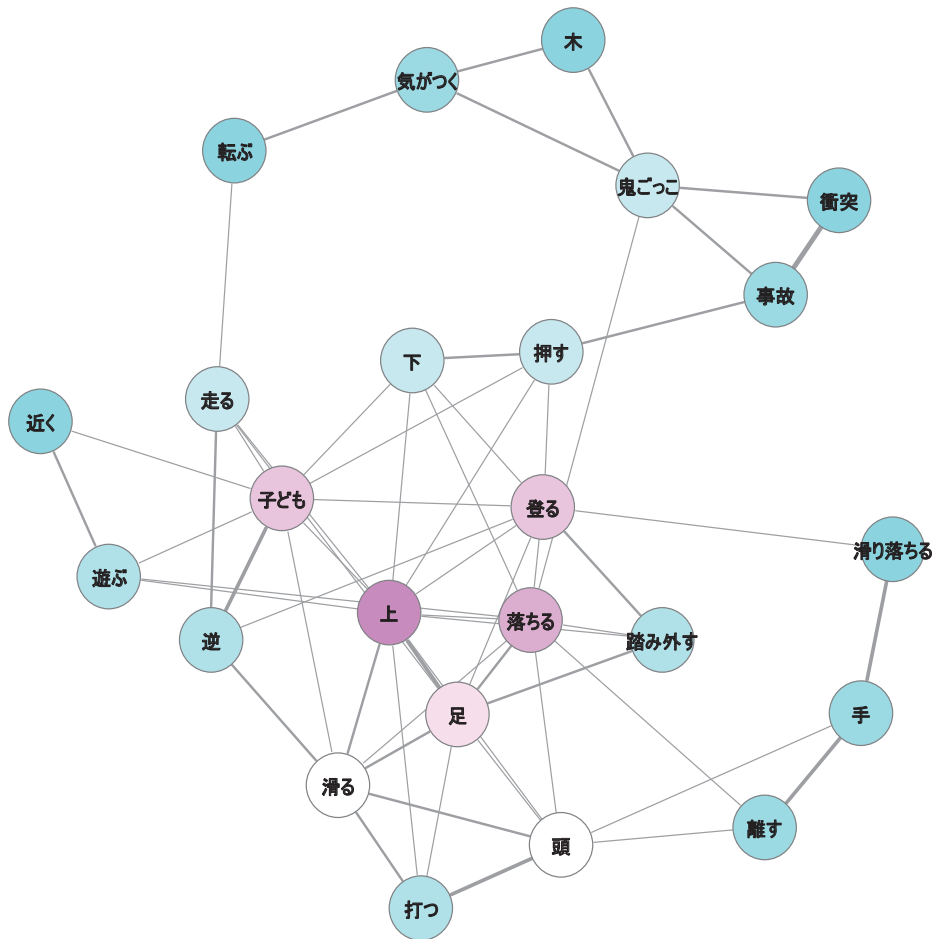


Fig. 2. 学生が園庭で事故が起きやすいと予測した状況の共起ネットワーク

事故が起きやすいと学生が回答した状況の共起ネットワークを Fig. 2 に示した。自由記述の回答数は、全部で41文であった。KHcorderには、原則として学生の記述内容を原文のまま入力したが、文意が変わらない範囲でいくつかの前処理を行った（「すべる」→「滑る」、「激突する」「ぶつかる」→「衝突する」、「～している間」→「～している時」、「転

倒する」→「ころぶ」、「～してしまう」「～ってしまう」→「する」)。また、具体的な状況を説明していない回答は1文みられたが(「怪我をする」)、分析の対象から外した。

Fig.2で示した共起ネットワークは、抽出語またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだものである。共起の程度が強いほど、たくさんの線で描画されている。Fig.2から、最も中心性が高い語彙は「上」、次に高い語彙は「子ども」、「登る」、「落ちる」であることが明らかになった。また、「足」「滑る」「頭」といった語彙も、比較的中心性が高い語彙として抽出された。さらに、Fig.2の右上において、中心性は高くないものの、「鬼ごっこ」「事故」「衝突」といった語彙が一定の結束性をもって抽出された。

4. 考察

本研究では、学生が幼稚園の園庭を自由に移動することで、事故が起こりやすい場所と状況を予測させた。本稿では、①事故が起きやすいと学生が回答する場所及び②学生が園庭で事故が起きやすいと予測する状況の2点を検討した。

まず、①事故が起きやすいと学生が回答した場所について、全国の保育所と幼稚園で実際に事故が発生している場所の調査研究(日本スポーツ振興センター, 2013)及び対象園に勤務している教員が回答した事故が起きやすい場所及び状況の聞き取りの結果と比較検討する。

事故が起きやすいと場所において、学生は大型の固定遊具を最も多く回答していた。日本スポーツ振興センター(2013)によれば、「滑り台」「鉄棒」「総合遊具」などが保育園と幼稚園の園庭における事故が発生しやすい場所である。したがって、実際に事故が発生している場所に、大型の固定遊具が多く含まれていることから、本調査で学生が大型の固定遊具を回答したことについては適切といえる。しかし、例えば日本スポーツ振興センター調査では、大型の固定遊具の他に「砂場」が事故の発生割合が高い場所であるのに対して、本調査において「砂場」は事故が発生しやすい場所として回答がみられなかった。このように、学生は予測していないが実際は事故が発生している場所については、今後、詳細に検討していく必要がある。

対象園の教員の聞き取りでは、対象園に勤務している教員への聞き取り調査によれば、園庭で子どもが事故を起こしやすい場所は「滑り台やジャングルジムは稀だが大きな事故になりやすい」一方で、最も多いのは「走っていて木の根などにつまずいて転倒する」、「走っていて振り向きざまに友達と衝突する」ことで事故が起きやすい。本研究では、授業の実施時に事故や怪我の程度について説明がなされておらず、子どもがつまずいて転倒したことが事故に入るかといった疑問が残る。また、授業の実施時に子どもが園庭で遊んでいなかったことから、子ども同士が衝突して怪我をするといった場面をイメージすることは難しかったと思われる。さらに、本研究は事故が発生しやすいと予測した場所の写真を撮影するように指示しており、「走っていて転ぶ」「友達と衝突する」といった具体的な場所を

特定できない場面であることが、予測を困難にしているように思われる。しかし、本研究では、大型遊具は事故が発生しやすいことは予測するが、砂場での事故や友達との衝突による事故は予測されないことを示唆しており、これを踏まえ今後の指導の参考になると思われる。

次に、学生が園庭で事故が起きやすいと予測する状況では、最も中心性が高い語彙は「上」、次に高い語彙は「子ども」、「登る」、「落ちる」であることが明らかになった。また、「足」「滑る」「頭」といった語彙も、比較的的中心性が高い語彙として抽出された。これらの語彙には結束性の高さもうかがえるので、学生は「高いところに登って落ちる」事故を最も予測していると解釈できる。

対象園の教員に対する聞き取りでは、固定遊具は稀だが大きな事故になりやすく、走っていて転倒したり振り向きざまに衝突したりする事故は発生しやすいと回答している。本研究では、事故の程度を含む定義について言及しなかったが、今回の結果から、学生は大きな事故は適切に想定しているが、小さな事故は想定していない可能性がある。このことについて、Fig.2 の共起ネットワークでは、中心性は高くないものの「鬼ごっこ」「事故」「衝突」といった語彙が一定の結束性をもって抽出された。本研究では、事故が起きやすい特定の場所を予測させる教示の仕方であり、走っていて衝突するなど場所を指定できない事故については、予測することが難しかった可能性がある。

5. 今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題を挙げておく。

第一に、授業で活用した園庭の状況である。本研究の授業は、新学期が始まる前に実施しており、子どもがいない状況であった。本研究では、学生が回答した危険な場所が大型の固定遊具に集中していた。しかし、実際に子どもたちが遊んでいる状況であれば、走っていて転倒したり、振り向きざまに友達と衝突したりといった危険を予測することができたかもしれない。授業で活用した園庭の状況が、学生の危険の予測にどう影響するかを検討することが今後の課題である。

第二は、事故の定義である。本研究では、授業のなかで事故が起こりやすい場所や状況を予測させたが、事故や怪我の程度については言及していない。実際は、死亡事故など大きな事故ほど、素早く危険を予知し回避することが不可欠である。想定される事故の大きさの観点からも検討をすすめて、学生が理解を深めることができる授業をつくることが今後の課題である。

そして第三に、学生の授業に対する評価や成果の検討である。本研究は、学生の回答結果の分析であり、学生が授業を通じて学んだと考えていることの検討はなされていない。授業を改善する観点から、学生から感想を聞き取ったり授業評価アンケートを分析したりすることで、授業の質を高めていくことが今後の課題である。

6. 引用文献

- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-。
ナカニシヤ出版。
- 伊東知之・大野木裕明・石川昭（2012）保育実習生のヒヤリハット認知を高める教材開発
研究. 仁愛大学研究紀要. 4. 39-52.
- 近藤充夫（1997）園生活と安全教育（総論）. 保育学研究. 35（2）. 8-11.
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針解説. フレーベル館.
- 牧野圭一（2013）保育現場における安全管理と危機管理のあり方. 筑紫女学園大学・筑紫
女学園大学短期大学部紀要. 8. 189-201.
- 文部科学省（2012）新たな未来を築くための 大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続
け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）. 中央教育審議会. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf（情報取得 2017/9/15）.
- 日本スポーツ振興センター（2013）学校の管理下の災害（平成 25 年度版）-25- 基本統計.
http://www.jpnport.go.jp/anzen/anzen_school/tabid/1701/Default.aspx（情報取得
2017/9/15）
- 小笠原文孝・根上優・崎村英樹・玉村敏郎・安留隆（2010）保育環境の整備とリスク・ガ
バナンスに関する研究. 保育科学研究. 1. 126-136.
- 大西昭子・矢野智恵・片岡亜沙美・森澤徹男・小島一久・山崎美恵子（2013）保育士が捉
えた「健康及び安全」への取り組み状況と課題に関する検討-保育所施設長に焦点を
あてて-. 高知学園短期大学紀要. 43. 17-30.
- 民秋言・穠丸武臣（2014）新保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 保育内容健康〔新版〕.
北大路書房.
- 田中哲郎（2006）保育園における危険予知トレーニング 事故を防ぐリスク感性を磨くため
の. 日本小児医事出版社.
- 田中哲郎（2011）保育園における事故防止と安全管理. 日本小児医事出版社.
- 浦添綾子・仙田満・矢田努（1997）幼児の活動空間における安全性について. 保育学研究.
35（2）. 232-239.